

俳句雑誌



空

令和4年2月25日発行

第19巻6号

通巻第100号



2022・1・2

SORA 100号

神奈川

窪 み ち 子

声弾む籠の揚羽が羽化せしと
 高射砲陣地の跡の揚花火
 病む床より眺むる名画夏夕べ
 夫の忌の九月の雨にまどろめり
 秋の日や絵本の豚は痩せつぽち

長崎

仲 里 奈 央

脳天に踏切の音炎暑来る
 落蟬やしあはせとやら見つけたか
 見守りてくるる人あり秋桜
 虫の音や娘と本の回し読み
 三日月や優しき祖母の目の細さ

兵庫

林 徹 也

本殿へ上る百段秋の風
 一合を母に供ふる糸瓜水
 通学の一両列車稲の秋
 父のせしやうに鎌研ぐ夜半の秋
 秋暑し隙間の増ゆる脳画像

福岡

三井所美智子

堤防をバイクの僧や盆の来る
 門火焚く洋館前の若夫婦
 虫の声休耕田を草被ふ
 白和へは毎度や茹でし隠元豆
 通院の今日はこの道百日紅

北九州

横 田 敬 子

寺の猫またも脱走立葵
 青北風や石玉垣の字のかすれ
 われからの鳴く声聞かむ忘れ潮
 生身魂ラジオで学ぶ英会話
 ゆらゆらと物干し竿に蛇の衣

北海道

押 田 裕 見 子

猛暑日の飛べぬ鴉の二羽三羽
 高鳴りの猛暑を泳ふ心の臓
 日の盛り気に障りたる鬱の文字
 夏休みパズルのピース失せて果つ
 正座して盆の慣ひを子へ語る

兵庫

岡 村 尚 子

風音に盆灯籠を灯しけり
 友垣の一人欠けたる天の川
 秋暑し仏壇にあるコップ酒
 天高し島へ巡行船一つ
 かたまりてこんなところに彼岸花

広島

星 加 鷹 彦

電停はどこも野晒し寒の入
 山眠る色あるものは色を捨て
 寒晴や水切り石は水を削ぎ
 人生百年なら八分目冬ぬくし
 妻老いて母のごとしや木の芽和

白秋や眼するどき薩摩鶏
ちちろ鳴く砂地の墓に箒の目
土葬せられし祖父の墓洗ひけり
鴉の鳴く枝が上座となりにけり
人寄せぬ吹上の浜鷹渡る



伊藤通明・自句自註

昭和三十八年刊「自註現代俳句シリーズ」より

手の内の水仙の香となりにけり

昭和四九年作

北の部屋の西窓に向けて机を置いていた。昼間は誰も居ない家であってみれば冷えきっているが花は芳香を放っている。「手の内の香」を思った。

蛤や生家のひろき勝手口

昭和四九年作

私が生れ育った家の勝手口は東西に一つづつあって、共に大きな引き戸がついていた。開放すると風の通り道となる。この句「蛤」がすべてか。

息深くして淡雪の榭林

昭和四九年作

雑木山のつづきに榭林があり、それに沿った柚道の右側は松山であった。榭の腐葉土の匂いに混って折からの泡雪。父が手放した山の一角にて。

初蝶や錆て怠けし蝶番

昭和四九年作

錆びついて殆ど役をなさない掃除道具入れの蝶番。それでも手で支えるようにして戸を固定させる。折から初蝶、ここは怠けていてもいい蝶番。



農薬の横に置かるる蝮酒

直方 石橋幾代

さきがけは休耕田の曼珠沙華

二階まで家並明るし踊唄

秋簾少し巻き上げ世を眺む

火の熾る匂ひ流るる宵祭

青田風名を呼びつづけ猫さがす

午後三時バス歪み来る炎天下

風通ふかつて兵士の籐寢椅子

子が四人蚊帳に眠りし昭和かな

朝風呂の背を流し合ふ敬老日

銀鱗を削ぎ落しては鮭上る

膝の上に男浴衣を畳みをり

北邨 押田裕見子

福岡 高倉和子

秋燕や寺は石段ごと古ぶ

やはらかく膝に来る猫夜の秋

湧水に磨かれし砂鳥渡る

秋の草子犬の顔に揺れてをり

崩れ築遊ぶごと魚落ちてゆく

手放せばすぐに忘れて鳳仙花

蛇も吾に驚く首を上げにけり

東京 中田みなみ

凸凹に瓦礫にりて穴惑ひ

生在りてこそその新米焚き上る

耳紅く歌ふ聖夜の募金函

生と死の点滅聖樹くり返す

離乳食卓に加はる聖夜餐

爽涼や木屑まみれの木地師の手

福岡 永淵恵子

三方より脚立張りつく松手入

がらんどうの切腹の間に秋の声

一族は根こそぎ絶えし曼珠沙華

清姫の菊人形はまだ半裸

吸うて種吐き出すばかり石榴の実

雷鳴のたびに夜空の剥がさるる

直方 曾根富久恵

雨過ぎし道の光や魂送り

去年の服また着せられし案山子かな

押入れの多き生家や昼の虫

馴染むまで入れし襖を滑らす

秋夕焼質屋の窓の鉄格子

秋風や荒磯まで踏む松の影

北州 深川淑枝

波かすめ飛ぶ鳥白き終戦日

颱風へ漁小屋繩に縛り上げ

芋殻火やくらやみへ波返る音

畏はじけしあとの静けさ秋の山

幾百の色が揺れをり金魚桶

広島 戸栗末廣

空集抄 柴田佐知子抄出

湧水に磨かれし砂鳥渡る

高倉和子

農薬の横に置かるる蝮酒

石橋幾代

風通ふかつて兵士の籐寝椅子

押田裕見子

凸凹に瓦礫迂りて穴惑ひ

中田みなみ

爽涼や木屑まみれの木地師の手

永淵恵子

雷鳴のたびに夜空の剥がさるる

曾根富久恵

秋風や荒磯まで踏む松の影

深川淑枝

父の部屋しづかに開くる盆休み

戸栗末廣

立秋や鋤を担げば背筋伸び

原友子

ひきがへる一歩あゆみて一歩老ゆ

角野良生

喉奥に舌をしまひて蛇穴に

吉田 律

出水あと野晒れ魚喰ふ鷺二百

田中とし江

殉教も棄教も峡の水澄めり

林 徹也

虫時雨こゑ聞き分けて名は知らず

河原敬子

良妻も悪女も古いぬ草の絮

えとう樹里

おほうみの音なき遠さ鳥渡る

兒玉充代

誰よりも声の大きな生身魂

岩下きぬ代

銀木屋恋の手前であとずさる

仲里奈央

片意地は短所に非ず白桔梗

田岡千章

田の水を落す一戸となりにけり

山本則男

水澄むや郷に還りし父母の骨

大西乃子

雨音にいつかつつまれ冬仕度

あき千晴

原つばは少年のもの夏空も

今井康子





空蟬となりて我が家と離れざる

森田明成

愚痴こぼしをれば草矢の飛んで来し

吉田悦子

子に恋の一つあるらし天の川

青木朋子

犬来ても猫は動かず春の風

田中素直

砂浴びの番待つ雀赤のまま

坂口学

なほ続く交信夜半の虫と星

野中みのり

井戸蓋に干す俎板や豊の秋

井上和子

新涼や沖の汽笛が祠まで

佐藤和弘

税務署の封筒に窓鳥渡る

星加鷹彦

くるぶしに夕べの雨滴螢草

山田正子

昼寝子の絵本が風にめくれをり

窪みち子

つつと行き否と向き変へ蜥蜴の子

本多トミ

馬の背をひと撫でしたる秋の風

松井順子

蓮の花傷つくほどの雨となる

石井みゆき

餌を探す鳩の訝る寒施行

高畠浩一

勝手に生えおもちやのやうな南瓜なる

岩井京子

子の出番なくばテントへ運動会

後藤園子

風薫る何も要らない森の朝

林れい

コスモスの中にいくつも笑顔かな

矢野綾子

鈴虫のこゑの混じれる子守歌

日高孝

家ごとに違ふ夕ぐれ秋刀魚焼く

荷宮克代

新米を積む軽トラの追ひ越さる

横田敬子

こんな日は家人も他人薄暑かな

松尾康代

今採つたとむき出しに蛸手渡さる

むつみ蓮

体調不良は生者の証秋の虹

牧康子

天の川そこは亡き子の現住所

白水良子